昨年の 11 月 13 日（木）から 19 日（火）にかけて、公益財団法人 金子国際文化交流財団の代表団がカンボジアを訪問した。柳沼理事と奥沢事務局長に寄稿をお願いした。

カンボジアを訪問して

(公益財団) 金子国際文化交流財団　柳沼　壽

昨年 11 月 13 日から 18 日まで、カンボジア日本友好学園を訪問した。茨城キリスト教大学の藤田悟先生が続けてきた現地の若者の大学進学支援に財団として関与することになったため、現地視察と関係スタッフとの協議を兼ねて訪れたものだが、以下、カンボジア滞在期間中の印象などを綴ってみたい。

まず、プノンペン市内で目につくのは高層ビルやマンションの建設工事で、中国語の説明図等から、中国資本が中国人目当てに建設している様子が伺える。

今回、プノンペンにある王立法律経済大学内の JICA 事務所で学生諸君を前に講義をする機会を得た。教育インフラ整備の重要性は理解していたが、大学キャンパス内に JICA 事務所があるのは予想外であった。講義終了後に学生諸君から手を合わせられたのは今思い出しても大変気恥ずかしい。

友好学園で一泊してキャンパス見学もしたが、電力事情が悪く、日本製冷蔵庫・電子レンジは動かず、照明もない教室で授業が行われていた。福岡女子学院の学生が日本語教師として滞在している姿には心打たれるものがあった。

食事面では大体麺類 (日本でいうタンメン) を頼んだが、薄口のスープにミントの葉が浮かび、独特のさわやかさがある。ある店で、日本の即席ラーメンの麺が使われているのに気付いたり、現地通訳の実家で、庭のバナナとコメを練り混ぜたスイーツを食べる経験もした。どんな田舎でも米ドル払いが日常的で、現地通貨リエルでの支払いは殆どなかった。また、プノンペン市内でカフェやパン屋をかなり見かけたが、フランス統治時代の影響かもしれない。

カンボジア産コーヒーを市内で、カシューナッツを空港で買い求め、帰国後しばらく思い出に浸ることができたことを最後に付け加えておきたい。

前から 2 列目・左から吉田理事、柳沼理事、コン・ボーンさん、イム・ヤ校長、奥沢事務局長　写真提供・金子国際文化交流財団

第 16 期奨学生のサポータを募集しています！

初出張

(公益財団)金子国際文化交流財団事務局　奥沢 文子

令和元年11月14日（木）から、奨学生との面談と友好学園見学を主目的としてカンボジアへ行きました。翌日友好学園へと移動し、校長室にてコン・ボーン氏をはじめ運営委員のメンバーと会合をもち意見交換をしました。

私は何よりも生徒たちの授業風景を見るのを楽しみにしていました。かねてより友好学園の授業は午前7時から１１時、午後2時から4時と聞いており、会合の前後の午前10時半頃と午後3時半頃に校内を見学しました。授業中の教室もあったけれど、どちらの時間もかなりの生徒が帰っていくところでした。新学期が始まったばかりだからかもしれませんが、キッチリとは授業が行われていない印象を得て少々残念に思いました。すれ違った生徒たちに話しかけると、皆恥ずかしいのか小声でしか話さないけれど必ず笑顔で答えてくれたのは好ましかったです。

目を引かれたのは校庭にあった空ペットボトル用の大きな籠で、その売却益は学校の運営費の一部になっているそうです。日本の学校でベルマークを集めるような感覚でしょうか。16日（土）は年度初めの校内清掃の奉仕活動日とのことで、鍬や鎌や箒を持参する生徒の姿が見られました。朝礼に我々も参加しましたが教員は校長の他数人しか参加しておらず、また教員が生徒の出欠を取っている様子もなく、そんなところも日本とは違うなと感じました。

プノンペン市内で夕食会を催し、財団の奨学生と直接会い、1人1人から近況報告をしてもらいました。市内の親戚宅に同居の人で働いている人はあまりおらず、アパート住まいの人は皆働いていました。こういう学生にこそ援助したいと強く思いました。奨学生たちとはもっとゆっくり話す時間が欲しかったです。

滞在中、通訳兼コンダクターとしてオン・リナ氏に大変お世話になり感謝しております。どうか皆元気で頑張ってください。

奥沢さんの「個人的覚書」から

令和元年11月15日（金）

8:00 送迎車にて友好学園に向かう。……プノンペン市内の道路は自動車で大渋滞していたが、ほとんど信号がなく、その為直進も右左折も、どの車もほとんど阿吽の呼吸だけで突っ込んでいくので、アクロバットのようだった。絶対普通の日本人はここで運転は出来ないと感じた。

‥‥

15:30校内を見学。生徒の授業の様子を窓の外から見学した。数学の授業中の黒板の板書をノートに取っているところをのぞいたらその子はボールペンを使用していた。文房具の値段が気になった。

‥‥

校庭にフットサルコートをつくる為、工事中だった。

最近招かれて日本へ行ってきたという女子中学生がいて、オン・リナ氏に「日本語で話してみなさい」と促されて自己紹介をしてくれた。発音も悪くなく、声もしっかりはっきりと出せていて、思わず拍手をしてしまった。笑顔がとても良かった。

‥‥

学校から送迎車で数分の所にある近くのマーケットを見学した。大きな天幕のような屋根の下に1軒が3畳程度の小さな店40～50軒がびっしり肩を寄せ合っていて、ここで生活用品はほぼ手に入るようだった。試しに文房具を置いている店（文房具専門店は見かけなかった）で鉛筆とボールペンを1本ずつ購入してみた。2つで1600リエル ($1=4000リエル、約45円)だった。

‥‥

令和元年11月16日（土）

8:30　送迎車で近隣にて朝食。食後、財団3名は送迎車で30分ほどのベトナム国境を見学、国境警備の歩哨がいたのと大型トレーラーに山積みされたカンボジア産の米が次々に船に積み替えてベトナムに運ばれていく様子を見た。オン・リナ氏は「ベトナムは一軒一軒の農家から安く買いたたいて持って行ってしまう」と悔しそうに説明していた。日本の農協のような組織はないとのことだった。

その後、オン・リナ氏の実家に寄った。オン・リナ氏のご両親をはじめ姉妹らや甥姪に歓迎して頂き、お茶・もぎたてバナナ・菓子などをふるまわれた。農家のくらしを垣間見ることができ、興味深かった。また、近くのコン・ボーン氏が一番初めに校舎を建てた学校にも寄った。現在オン・リナ氏の甥っ子も通っている学校で、学年によって午前と午後とに分かれての授業になっていると聞き、圧倒的に年間総授業時間が短いと感じた。

オン・リナ氏の甥っ子が輪ゴムを長くつないだものを持っていて、それで遊んでいるというので、近くにいた他の子供たちと一緒に実演してもらったところ、私自身が子供のころ遊んだのと同様で、とても懐かしかった。